解説

藤元 優子

・スィーミーン・ダーネシュヴァル（一九二一―二〇一二）は、イランにおける女性作家の草分けの一人である。九一年の生涯に短編集四冊、長編三冊というのは寡作といえるが、長年テヘラン大学で長年美学を講じた他、イラン作家協会会長を務めたこともあり、国民的人気と尊敬を集めた作家であった。一九六九年の長編『サヴーシューン（スィヤーヴォシュの服喪式）』がとくに名高く、今では現代文学の古典と呼べる作品のひとつとなっている。

「楽屋」は、その代表作より八年前に出版された二冊目の短編集『天国のような町』に収録された。様々な表象を用いて示される光と闇のコントラストが鮮やかなこの作品は、発表後半世紀以上を経ても、瑞々しさを失っていない。

＊　＊　＊

イランでは、宗教的制約もあって演劇があまり発達しなかったが、スィヤーフ・バーズィーと呼ばれる喜劇が、古くから結婚式や割礼式などの祝いの席で演じられてきた。顔と手足を黒く塗り、赤い衣装を着たスィヤーフ（黒の意）は、この劇の中心人物で、冗談とおふざけで観客を笑わせつつ、時に他の人が口にできない真実をずばりと言い当てたりする道化である。この小説でも、道化のメフディーは、芝居の役回りとしてだけでなく、観客や官憲に向かっても、辛辣で際どい言葉を吐く。場所は、テヘランの大バーザールの南東にある「尊師廟（サレ・ガブレ・アーガー）」と呼ばれる墓廟と墓地の近くの芝居小屋、時代は二十世紀半ばに設定されていると考えられる。

作品のテーマを一言で言えば、道化メフディーがカリフの姫役の娘に抱く慕情が、実生活の苦い現実の前に打ち砕かれていく哀しみ、とでも纏められるだろうか。それぞれに矛盾と葛藤を抱えた登場人物の人間像は、芝居の中、舞台裏、そして実生活という三段構えで重層的に肉付けされている。

題名の「楽屋」は、舞台と実生活を繋ぐ舞台裏の空間である。役者はそこで化粧を施し、衣装を着て、まったく別の人格になり、芝居が終われば平凡な庶民に戻る。道化は、舞台の上では機知溢れるトリックスターだが、一歩舞台を下りれば誰にも気づいてもらえない初老の男に過ぎないし、白い肩とナツメ色の髪をしたカリフの姫は、黒いチャードルに身を包み、五度目の堕胎手術に向かわなければならない。また、舞台で人の足を引っ張るダメ役者は、現実世界ではインテリのお坊ちゃんである。彼らの変身の場に入り込み、その生き様を追うことで、私たちは人の持つ多面性、可能性とその限界を知らされる。「俺たちはみんな、ほとんど顔が黒い」し、「黒塗りは完全には落とせない」という道化の言葉は、誰もが理想と現実の狭間、人生という劇場の楽屋にいて、悲哀や苦悩に耐えながら生き続けなければならないことを意味しているのだろうか。

物語の終盤、主人公たちはジュージー・ハーン氏の一風変わった部屋を訪れる。そこに置かれた、笑い顔にも泣き顔にも見え、女でも男でもある奇妙な彫像は、役者の似姿であると同時に、人という複雑怪奇な生き物の象徴なのかもしれない。

ダーネシュヴァル作品のうち、二つの短編の邦訳が公刊されている。「私は誰に挨拶しよう？」（石井啓一郎訳『すばる』第三〇巻十二号　二〇〇八年）と、「アニース」（藤元訳『天空の家―イラン女性作家作品集―』段々社　二〇一四年）で、どちらも短編集『誰に挨拶しよう』（一九七九年）に収録された作品である。また、「楽屋」に関しては、拙論「S. ダーネシュヴァル著「楽屋」における両義性」（『イラン研究』第十二号二〇一六年）がある。